

旧・附属看護学校

赤沢 陽子

千葉大学医学部 135周年を記念して ——旧看護学校および同窓会の35年——

1. はじめに

千葉大学医学部附属看護学校は、1974年（昭和48年）医学部100周年を記念した年から28年後の2002年（平成14年）3月31日に、第52回卒業生を以って閉校となり、後事は同窓会に託されることとなった。この経緯については閉校記念誌『ゐのはなの想い出』——2002年（平成14年）千葉大学医学部附属学校閉校記念誌編集委員会——に詳しい。そこには、社会・医療を進歩に導く未来を見据えながら、卒業生、学校・医学部・病院の諸先生方、そして職員の方々の無念の思いが述べられている。この千葉大学医学部135周年の記念誌では、本校の歴史を簡単に述べ1948年（昭和23年）新制度スタート当時の貧しくても希望に溢れた社会を背景に、看護の学び舎にあって、看護を学び得たことやその理想を熱く想った卒業生諸氏の卒業式答辞の一部を紹介したい。さらに、医学部100周年以降、社会が復興を遂げ、物質的に豊かになり、人口動態・疾病構造の変化および医学・医療技術の進歩により、変化した保健・医療・福祉の社会的ニーズに応じて、看護教育が変革された内容にふれる。さらに、看護職の質的ニーズに応えつつも、本校が看護教育の100年余にわたる教育実践から得た知的財産を残し、加えて看護の質を支える量的問題を抱えたまま閉校に至った過程を辿り、看護教育をあらためて考える機会にしたい。最後に看護学校閉校後、引き継いだ本校卒業生1765名を会員とする同窓会の活動と今後の課題についても述べたいと思う。

2. 看護学校の歴史

1) 歴史の概略

1874年（明治7年）千葉大学医学部の前身・共立病院の創立から27年後の1901年（明治34年）県立千葉病院看護法講習所から始まり、千葉大学附属病院厚生女学部専攻科を経て1948年の新制度が始まる間の47年間における卒業生総数は1453名であった。その歴史の詳細な記録は50周年を記念して編集され、歴史資料としても優れた『看護学校のあゆみ』千葉

大学医学部附属看護学校——50周年記念誌——1998年（平成10年）がある。また、前記した『ゐのはなの想い出』にも詳しいので是非参照してほしい。

1948年（昭和23年）新憲法に基づく医療法、保健婦助産婦看護婦法・看護婦学校養成所指定規則が制定され新制度の看護教育が開始された。その目的を「保健婦助産婦看護婦の資質を向上し、もって医療及び公衆衛生の普及向上を図る」とし、保健婦・助産婦・看護婦の業務の定義を明確にした。1948年（昭和23年）4月、千葉大学医学部附属看護学校が開校してから、2002年（平成14年）3月31日、最後の第52回卒業生37名の卒業まで、卒業生総数は1765名に達した。閉校のその後は千葉大学医学部附属看護学校同窓会に託されたが、同窓会は、すでに1969年（昭和44年）5月に発足しており、2009年（平成21年）には40周年を迎えた。その記念として編集した『ゐのはなからの旅立ち』から、「卒業生答辞」にみえる本校の看護教育の成果の一部を紹介しようと思う。

2) 「卒業生答辞」にみる社会の状況や看護の理解と成長そして抱負（抜粋）

- ・敗戦の余波なおも打ち続く社会情勢のなかで～。病める者の幸福安全のため、社会は私共に大きな要求をいたしております。深い人間愛を根本とし、さらに知識を求め、優れた技術を修得し、若き力と熱とをもって応えなければなりません。（昭和26年1回生）
- ・今やわが国における看護の改善はこの道の有識者により強く叫ばれ、実践され、世論をして漸くにそれを認めさせる迄に押し進められて参り～。私たちは革新看護会の先端を行くべき誇りと自覚を新たにし～。肉体的精神的苦悶に陥っている人への愛の奉仕者として～。真に文化国家平和国家建設の一員としてより高く理想化される看護界の向上を目ざし～。（昭和27年2回生）
- ・混沌たる終戦後の社会情勢にあり～。人間、赤裸々な姿を目の当たりに見、人間の本当の弱き面に接することの多い看護の道ほど隣人愛を要求され必要とするものはない。直接的間接的生死に関係することを考えると使命の重大さに

今更ながら慄然とする。（昭和28年3回生）

以上は、戦後の混乱期にあっても、新しい息吹を感じさせる社会を背景にして、看護職の社会的使命を明らかにした教育内容をもとに開校された、当時の卒業生の希望と情熱に満ち溢れた決意と抱負を表明する力強い姿がある。また、看護界の将来に対しても明るい未来を期待するものであったと思われる。

- 世界情勢の変転の中であって、わが国では看護婦の労働問題が大きく取り上げられ、全国的に病院ストがくりひろげられ、社会の要求に応じたよりよき看護婦となるため、若き力と情熱とを注ぎ進み。（昭和36年11回生）
- 全国では毎年何千人かが看護学校を巣立っていきますが、いっこうに看護婦不足が解消されません。～過酷な労働に耐えきれずやむなくあきらめる看護婦もいます。よりよい看護をするために、いくらかでも勉強のできる時間が欲しい。検査や処置の介助ばかりが看護ではなく患者の心をくみとり、不安を除いてやり、社会復帰への希望を持たせることこそ、看護の大きな責任です。これから一スタッフとして働くにあたり、労働改善や研修制度確立のために努力したい。（昭和44年19回生）
- 臨床実習では受け入れ体制の整った科もありますが、十分な指導を得られない科が多く、学校側の指導も臨床に任せきりな状態です。～三者会議を設けました。患者中心の看護を目指したい。（昭和48年23回生）
- 看護の何たるかの確立されていない今日、看護とはなにかの壁にぶつかり徹夜で討論した。（昭和49年24回生）
- 各種学校であることからくる不十分な施設の中で、あらゆる教養や専門知識を身につけねばならない現実を、手探りで勉学生活をする。社会生活を営む一人の人間としてとらえた上でなければ患者を看護することはできない。（昭和51年第26回生）

看護学校創立30周年記念誌『飛翔』——1978年（昭和53年）——に、前校長の久保正次氏、教務主任鶴岡藤子氏が戴帽式や卒業試験廃止の運動に学生と向かい合う労苦を記している。また、同書の序文では学校長牧野博安氏が「本邦における看護という体系の運営は、女性によりなされていることもあって、女性として社会の壁と波にぶつかり、悩みが多いであろうことは、本学校の歴史にも現れておりま

す。」と興味深い内容が記されている。看護師の多くは女性であり、その歴史的・文化的差別は、看護教育制度や臨床の場における多くの問題の底流として今日まで流れており、それが看護実践や看護教育の理想と現実の間での苦悩を深くし、未来を志向する学生にもその影を落としている。このような中にあっても、千葉大学では、学園で自由に学び、学生宿舎も早い時期から（昭和34年）自治寮として学生の意志と責任において運営されるなど、学校の自由な学風が社会に向けた広い視野を育み、自己を確立することができたと思われる。この学風こそ同窓生の“誇り”として今日まで卒業生を支え続けているものである。

- 不況とインフレの激しい現在の日本において、医療や福祉は多くの問題をかかえており、真に国民のためになっているとはいえないのではないか。日本の医療が患者の回復だけでなくすべての人々の健康増進へとつながるよう学んだ。

（昭和53年第28回生）

- 近年看護は医療において補助的な役割という長い歴史を塗り替えつつ、確かな理論に裏づけられた学問として、また専門職としてその地位を高めようとしている。生きることの本当の意味、喜びも悲しみも人と人との交わりの中にある、人間が人間を援助することが、どんなに困難でしかも素晴らしいことか～。

（昭和54年第29回生）

- 真の看護とは、医療の中で患者自身がその生命の尊さを知るよう、そして自然に作用するよう働きかけることがその本質であることを心に刻むことができた。（昭和55年第30回生）

- 3年間の総合実習を終える頃おぼろげながら自己の看護観を築きあげ、一人の看護者としての姿勢を身につけ、また一人の人間としても成長した自分に気づき胸を熱くしました。患者さんは人間です。私たちも人間です。技術の進歩に流されず、人間の心のふれあいを大切にしたい。（昭和63年第38回生）

- 余命いくばくもない患者さんや、生命の誕生の瞬間に立ちあい、心が震えるほどの感動を覚えたこともあった。生と死の現実を見、赤裸々な生き様に触れる体験を通して生命の尊さと生きることの素晴らしさを教えてくれたのは患者さんでした。（平成元年第39回生）

- 病棟では一人の看護婦が何人もの患者を受け持ち、走り回るようにケアしている状況も目のあたりにし～。看護婦の数が増えることを願いつ

つ、一方で看護の質が問われる時代になっていることも実感する。(平成7年第45回生)

- 専門学校の教育は、座学でのみ知識を得ていた教育と異なり、実習を通して知識や技術を深めてゆく学習でした。自主的に学ぶ姿勢の大切さや、社会の厳しさにも直面して、自分の未熟さを痛感して悩んだり、目標を見失いそうになった時、支えあい励まし合ったのはクラスメイト達でした。困難な場面を一つ一つ乗り越える度に友人の絆は深まり、各々が成長できたと思います。(平成12年第50回生)
- より高度な大学教育に託し、亥鼻の地から去ることも貢献の一つの形と考えつつも、母校の閉校に対し、抛り所を失う痛みを感じております。母校の閉校は時代の要請であり、今後の医療の発展にとって、意義ある撤退と受け止めております。しかしながら、閉校は卒業生の職業継続上、影響を生ずる場合もあると思います。この点は、母校の閉校を新たな同窓会の出発点とすることで、卒業生同士の連携を強化し、保健・福祉・医療界にますます貢献してまいりましょう。私たち卒業生がいつの時代においても職業的自立を守り続けられたのは亥鼻の学風と母校の教えでした。真に私ども医療職者を育ててくださった患者を始めとする地域社会の方々、講師の方々、そして母校にあらためて感謝申し上げます。

(平成14年 閉校式卒業生代表)

多くの答辞に見られるとおり、本校の看護教育の成果は、社会・医療、看護・看護教育の変化に果敢に立ち向かう強い意志が育成されている。また看護の対象を健康・不健康を問わず、全ての人間であるとし、人間を身体的、精神的、社会的統合体として、さらには生活者としてとらえている。またケアを受ける人々から多くを学ぶことができたことに感謝し洞察力を獲得している。このような学習成果は専任教員の努力に負うところであり、小規模の看護学校が学生の個性を大切に、寮における生活も、学習の場となり、社会の一員として“共に生きる”体験はケア提供者として重要な学習であると考え。

3 看護教育の変遷

——1948年(昭和23年)新制度以降の看護教育変化——

1) 『千葉大学医学部百周年記念誌』

——「看護学校」——鶴岡藤子について

鶴岡藤子は『千葉大学医学部百周年記念誌』1978

年(昭和53年)「看護学校」P265～280で次のように述べている。「昭和23年保健婦助産婦看護婦法が制定され、看護の考え方も臨床看護から疾病の予防、健康の保持増進を含む幅広いものとなった。そして医療と看護は“車の両輪”の関係にたとえられ、看護の質的向上と主体性が要求されるようになった。看護教育も医師の手から看護婦へと移り、そして科学的思考の下に看護できる人間を目標に新しく始められた。これは戦後アメリカの指導によるもので、医師の助手的存在であった戦前の看護婦と比較すると画期的なものといえよう。」さらに「本校の学則に明記されている第1条の目的からは新制度の趣旨に沿った看護婦を育成するための大学レベルの教育を目指している」としている。また「学校教育法第1条による教育でなく、83条の各種学校に基づく教育では、設置基準が不明確で教員組織、施設設備が不十分であり、教育効果を高めることが困難である。」と記されている。筆者である鶴岡藤子は看護教育に当たった後、附属病院看護部長としての重責も果たされた。看護学を学ぶ若者に対し、一人の人間としての自立と看護職者としての能力獲得のための支援を行い、後に看護管理者として、国民への医療・看護サービス提供の重責を自覚され、それらに取り組む上での諸条件の不足・不備に多大の苦悩をされたであろうと想われる。前述の卒業生答辞にも見るとおり、学生として、教員・実習指導者の不足や、実習病棟で目の当たりにする先輩看護師の過密な看護実践の実状など、教育環境の不備・不足への不満や臨床現場の実態に対する不安についても述べ、改善の願いが込められている。

2) 医学部100周年以後の看護教育の変化

前記した多くの答辞から看護教育の内容の変化・進歩が読み取れる。1967年(昭和42年)戦後初めてのカリキュラム改定があり、その目的を人間形成と職業教育とし、短期大学を指向するものであった。『飛翔』の「学生自治会」では本校の短大化を願う旨が記されている。1987年(昭和62年)の改定では専門職としての社会的評価を受けられるよう知識・技術、ヒューマニティやリーダーシップ能力を獲得することにあり、大学指向を目標とした。また、1997年(平成9年)の改定では単位制の導入や専任教員の配置の4人を改め、8人以上とし、施設設備の改善などの改訂があった。カリキュラムの改定から見てきたことは、国民の要請に応じて、保健・医療・福祉の広範囲にわたる看護の役割を高い質で果たせるよう教育内容の改定はしたが、それに対応するための人的整備や施設整備などの改定は、50年

の長い年月を経ており、本校も、閉校を迎えるまで、基本人数4名の専任教員と非常勤講師で行われた。この事実、看護の中心的課題である「すべての人間の“生活”が生命を支え・守る」という、人間が生きていく上での最も重要な営みが、社会、特に医療において軽視されているための結果であり、今まで継続している問題であると考えられる。

4 2002年看護学校閉校を振り返って

— 閉校時教務主任・門川由紀江 —

閉校から7年余り経過し、多くの卒業生は時間経過とともに安寧を取り戻し、その絆も深まっている。この機会に看護学校の閉校状況を、記しておきたい。

国立大学医学部付設看護学校は26校であったが、平成元年に東京医科歯科大学附属看護学校、平成4年広島大看護学校が短大を経ずに専修学校から4年制大学への改組となった。その後、大阪大学医療技術短期大学部、金沢大、神戸大と短期大学部から大学への昇格ラッシュが続く中で本校は閉校となり、平成16年4月で国立大学付設の看護学校の4年制昇格は完了した。本学と同時閉校した東大看護学校は、医学部健康科学・看護学科へ「吸収合併」されたが、学内の看護師要請学科等へ看護教育を引き継ぐことができなかったのは本学のみである。千葉大学は、亥鼻の地で明治36年に前身時代の初の卒業生を輩出して、約110年間看護教育を実施している。昭和53年に創設された看護学部は、先達の看護教育にかかわる遺産を所有する医学部とは別に、日本の看護教育の発展を先導する立場で、新たな看護教育の歴史を刻んでいる。今後、更に時を経て、本学の看護研究者自身の手で、史実に基づき亥鼻における看護教育が総括され、本学の看護教育史が一本に繋がることを望みたい。

閉校時点での最大の課題は「卒業生の継続学習の支援」であったが今日、医学部教務事務担当者によって、膨大な量の証明書などの発行が支障なくなされている。また同窓会が保有している資料の一部を図書館（亥鼻分館）に保管管理を依頼しているが、専門的見地から適切な保管を頂いている。そして閉校による附属病院の看護職確保への影響が不安材料の一つであったが、看護部では、教育部門の充実を図る取り組みなどの対策を講じて、全国にわたって、優秀な新卒者を多数迎えている。閉校時の想定課題に対し、研修室の設置など発展的に解決処理して下さっている医学部・病院関係者に深く感謝

申し上げます、今後も継続的支援をお願いしたい。

5 千葉大学医学部附属看護学校同窓会とこれからの課題

本同窓会はその前進である“かつらぎ会”から引き継がれ、1969年（昭和44年）5月に発会し、2002年の閉校をもって1765名の会員を有し、2009年（平成19年）で40周年を迎えた。会の目的を「会員相互の親睦と向上を図り、福利を増進し、会の発展に寄与する。」とし、千葉大学医学部附属病院看護部内に事務所を置き、役員と学年幹事で運営し2年に1度の総会、1年に1回の会報を発行している。2009年5月の総会で25回を迎え、会報9号が発行予定であるが、その内容は会の運営状況や会員相互の交流の様子などを紹介している。2002年の閉校以後、卒業生の進学のための書類申請は海外留学3件、大学院11件、大学41件、放送大学20件、短期大学8件、学位授与機構6件、保健師・助産師の専門学校14件の100件を超えるものであった。ここには、看護学校で学んだことで更に学ぶ意欲を高める同窓生の姿がある。また閉校時、学校長税所宏光氏、同窓会長鶴岡藤子氏らが、「看護学校歴史資料等」として100点余の資料を医学図書館に保管・管理をお願いしている。そして、閉校までの発展的な解決を計る努力は実らなかったが、2003年には、最後の教務主任の門川由紀江氏の悲願でもあった、看護職者の実践教育に資する看護技術研修室を附属学校学生寮の跡地の一部を利用して設置できた。現在、看護部職員のみならず、他施設の看護職の研修にも活用され、その一室で、医学図書館保管以外の看護学校資料等も管理している。

医学部135周年を記念して、ここであらためて本校の看護教育を振り返る貴重な機会を得ることができたことに深謝したい。この振り返りを通して同窓会のこれからの課題を明らかにすることができた。即ち、それは、看護教育により、人間を陶冶するという観点から、専修学校の看護教育の成果の今日的意義を再考することである。そして、これらの看護教育の実践の蓄積は専門教育のみならず、初等・中等教育や社会教育に広く貢献できる可能性も考えられる。また今後の生活者重視の社会にあって、看護の社会的貢献も、ますます高められると思われるが、この点から、大学や大学病院および看護部の活動を見守ることが閉校後を託された同窓会の重要な活動であろうと考える。

（あかざわ ようこ）